

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12591

研究課題名（和文）在日ロシア語圏移住者の物質文化及び日本における多様性の様相

研究課題名（英文）Modes of Diversity in Japan: Russian-speaking Migrants and their Material Culture

研究代表者

Golovina Ksenia (Golovina, Ksenia)

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：30749156

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、オブジェクトベースド・インタビュー等の手法を用いて、在日ロシア語圏移住者による、衣食住等に伴う物質的实践を対象に4年間に渡る調査を実施した。その結果、対象者が住まう居住のタイプやライフコースに沿った居住経路、また引越し回数等を明らかにすると同時に、室内外の幅広い範囲での物質的实践（住居の修理や装飾、モノの作り替え、墓の清掃等）についてのデータを集め、アフェクト論や親族論等を含む本実践を取り巻く理論を発展させた。また、日本社会への影響について、移住者のプレースメーカーキングによる空間を活性化する効果が明らかにされ、また物流から外れつつあるモノに移住者が付加価値をもたらす過程が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで研究の比較的少なかった東ヨーロッパや中央アジア、北東アジアからの在日移住者を対象として、彼・彼女らの物質的实践を包括的に調査し、住まいや所有物、消費財などに伴うプラクシスを明らかにすることで、モノの人類学ならびにマテリアル人類学研究に貢献した。また、物質的实践をめぐる理論や概念について、移住者によるモノのプラクシスや語りを理解するにあたり、形態論、アフェクト論、情動的親族論、消費論、プリコラーージュやセミオモルフォシス等を適用し、さらに発展させた。同時に、これらの実践は日本に及ぼす影響も浮き彫りにし、移住者を対象とする実務家に役立つ事例を蓄積した。

研究成果の概要（英文）：This four-year research project focused on the material practices of Russian-speaking migrants in Japan. The project placed an emphasis on residences, homemaking, placemaking and various practices concerning food and clothing. The project also focused on determining the types of housing migrants inhabit, their housing paths, and relocation trajectories. Furthermore, data was gathered regarding home repairs and decorations, the (re)making of various items, exterior gatherings at symbolic locations, and tending to the graves of compatriots. It was demonstrated that migrant placemaking contributes to revitalizing material spaces. It was also revealed that many local items acquire new value through use by migrants and that such items are thereby incorporated into the transnational flow of goods. The research contributed to developing further theoretical perspectives in the frameworks of affect and kinship theory in addition to offering morphological approaches to migrant narratives.

研究分野：文化人類学

キーワード：在日ロシア語圏移住者 物質文化 住まい 衣食住 DIY コミュニティ形成 マテリアリティ
情動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者は、この研究を開始する以前に、行為主体性と構造を理論的枠組みとして日本人男性と婚姻関係にある在日ロシア人女性の研究を進めてきた。その際、インタビューのために多くの在日ロシア人の家を訪れる機会をもち、深い意味合いで溢れたモノの世界に魅了された。そこにあったのは、母国から持ってこられた鮮やかな土産物やヨーロッパの磁器、刺繍のアイコンやテーブルクロス、日本のフリーマーケットで手に入れられた焼き物やインターネットオークションで購入された油絵、着物の帯でできたクッション、また冷蔵庫に貼られた母国通貨のマグネットなどであった。部屋の中の様子は、強くロシアを思い出させるインテリアやユニバーサルデザイン、多様なインテリアスタイルが混ざり合った光景、日本的な住まい方にこだわる様子など、調査対象者によって様々であった。これらのモノや光景を目にし、在日移住者の物質的世界やホームメイキングに伴う実践の意味合いをノスタルジアや記憶、アフェクトなどをキーワードにアイデンティティ構築やコミュニティ形成、ホスト社会への社会統合の観点から思索する必要性に駆られた。

そこで、まず研究対象を広げ、ロシア語での調査に応じてくれる在日ロシア語圏移住者とした。日本におけるロシア語圏移住者については、出身国毎の差異は存在するものの、長期滞在者や女性の割合が高く、40歳以下の人口が大半であり、また教育レベルが高く、永住を目的とすることが多いという特徴がある。これらの特徴を考えると、在日ロシア語圏移住者はバイタリティのある外国人であり、日本にルーツをおろし、将来が日本と結びついていることから、長いスパンで見た時に日本社会への社会経済的な貢献が期待され、有意義な研究対象であると考えられる。また、日本では、移住者についての優れた研究が多く存在し、その中でも労働や結婚、在留資格というテーマが盛んであるが、東ヨーロッパを含む一部の地域からの移住者の研究や、移住者の住まいやホームメイキング、物質的实践を中心とした研究がまだ少ないということが本研究における対象やテーマの選択を裏付けるもう一つの理由である。

移住者の住まいや物質文化の先行研究は、イギリスにおけるジャマイカ人の住宅を研究し、移住者の送出国でのセカンドホームの概念を考察した Miller (2008)、同じくイギリスにおけるロシア人による所謂「ディアスポリック・オブジェクト」を中心に食を含めた物質文化の調査をした Pechurina (2015)、メキシコと米国の国境での正式書類のない入国者による所有物の摩滅過程に焦点を当て、「モノと身体」というスタンスを取った De León (2013)、タイの難民キャンプでのカレンニ族の物質文化や身体化された経験を思索した Dudley (2010) などの研究が挙げられる。これらの研究は、モノの具体的な形を示しながらもモノに隠されている意味合いを探ろうとし、所有者の人生においてもつ機能や意味を明らかにしようとしている。移住者の行動の物質的な「表現」を捉えることにより、移住者アイデンティティの理解に大いに役立つが、移住者の物質的世界をめぐる先行研究はいくつかの点において更なる発展を必要としている。それらの点は、1) 対象とされる物質的实践の範囲の拡大化、2) 移住者の住まいや物質的实践に伴う理論の展開(モノの主体性を重視するアプローチや移住者ナラティブとモノの相互作用を顕在化するアプローチなどを含む)、3) ホスト国自体への移住者の物質的なプラクシスの影響をめぐる議論、である。

上記の背景から、本研究では在日ロシア語圏移住者の住まいや物質的实践、物質文化の広汎的な研究に取り組み、上述の点を取り巻く本テーマにおける民族誌的なデータの豊富化とともに理論的な発展を目指した。

2. 研究の目的

本研究では、移住者にとっての物質的实践の象徴的な意味合いを探求し、またアイデンティティ構築やコミュニティ形成の過程を辿ることにより、それらに伴う文化人類学的な理論を発展することを目的に、在日ロシア語圏移住者を対象に物質文化におけるいくつかの現象—住宅・インテリア、所有物、服、食など—に伴う実践を包括的に調査した。また、物質的要素が構成的であるコミュニティ劇や墓の清掃といった移住者活動も調査対象に含めた。移住者アイデンティティ変容や在日ロシア語圏移住者によるコミュニティ形成プロセスに着目した際、使用されるモノに表されるこれらのプロセスやこれらのプロセスに影響を及ぼすモノという、モノの主体性を重視したアプローチをとった。また、移住者の物質文化や実践を独立した形ではなく、ホスト社会との相互作用の中で問うことを目的とし、移住者の物質的な実践やそれらの社会的現れがホスト国(日本)に影響を及ぼしているのか、またその影響がどのような形をとっているかを明らかにした。このように、進行中にある物質的实践やコミュニティの相互形成をダイナミックに捉えることで、大きな調査成果が期待できると考えた。

3. 研究の方法

本研究では参与観察やインタビューによるライフヒストリ・アプローチ、そしてオブジェクト

ベースド・インタビューといった方法を採用した。写真撮影を伴う対象者の自宅を訪問することを前提にし、一人あたり 2 時間以上のインタビューを設けることで、研究代表者が対象者のモノの世界と接触でき、モノの主体性を話題にしやすいセンサー・エスノグラフィの要件を果たした。また、移住者コミュニティ実践に伴うやりとりはオンラインで行われることが多いため、サイバー・エスノグラフィのアプローチも適用した。これらのアプローチのノウハウは、パンデミックを理由として一部の調査をオンラインで行わざるを得なくなったため、大いに役立った。続いて、適用したナラティブ分析において形式主義における V.プロップによる形態学的方法も使い、物質的实践とナラティブの相互作用を確認できた。最後に、4 年で蓄積したデータをもう一つの方法論的観点から考え直すため、研究支援者を雇い、スケッチングによるビジュアル・エスノグラフィを採用した。

4. 研究成果

本研究では、在日ロシア語圏移住者の広い範囲での物質文化や物質的实践を対象として調査をしてきた。以下に住まいや所有物、コミュニティ実践を中心に重要なポイントを挙げる。

住まいについて、外的な要因の影響で移住者が住むこととなっている居住のタイプを明らかにし、また住居の修理や装飾などの物質的かつ身体的実践を通じて住まいを「マイホーム」に変貌させる多様な仕組みの類型化もできた。在日ロシア語圏移住者の日本国内での引っ越し数は多く、30 名の対象者サンプルでの分析の結果、1~8 回(3 回の割合が最も多く、27%)であることがわかり、引っ越しの回数や居住のタイプは移住のタイプや日本でのライフコースの展開、滞在年数と関係していることが明らかとなった。本研究では、移住者が住まう 12 の居住のタイプ(賃貸・所有などの区分を含む)が見出されたが、以下は、ビジュアル・エスノグラフィを適用した一人の対象者の日本での居住経路である。このデータについて、移住者の来日前の居住のタイプとの関係性を辿り、また来日後の引っ越し・居住経路のシナリオを類型化した結果、一方ではライフコースとの結びつきの中でホスト国での住まいに具現化される移住者アイデンティティ変容、他方では移住者がアクセス可能なハウジングとそのための条件を明らかにした。

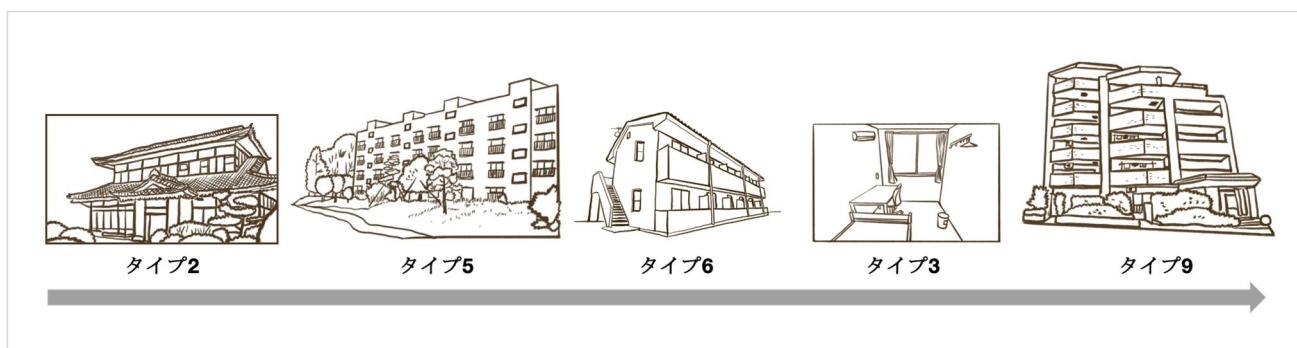


図 1: 対象者の居住経路のビジュアル化(データ処理番号: 15-181202)
イラスト: エルミロヴァ・マリア(研究支援者)

続いて、社会構築主義における housing pathways (Clapham 2005) というフレームワークを用いた上で、20 世紀の形式主義者・V.プロップによる分析手法を移住者ナラティブに適用しながら、引っ越しや居住経路におけるサクセス・ストーリーの構築プロセスを考察した。その結果、物質的なモノである住まいや形式的な行為である繰り返し実行される引っ越し、また身体化された語りの間の相互的な働きを見出し、移住者アイデンティティ形成に影響する要因を浮き彫りにした。同時に、語る主体の達成感に導き、連鎖移民を引き付けるサクセス・ストーリーが創造されるメカニズムも表面化した。

また、DIY の枠組みを適用し、移住者がその住まいの内装や修理、装飾などにより得る効果を探った。多くの在日ロシア語圏移住者は、日本で入居することに成功した住居を不便に思い、物質的なハビトゥスや身体的感覚において「我々移住者」対「現地人」といったパラダイムを構築している。そこで、その住まいを最低限でも修理することにより、「非現地化」を行うことによるホームメイキングを実現している。住まいそれ自体の性質やより広い範囲でのその改装や修理への着目は、移住者の生活空間を考えることに当たり重要な手掛かりとなると考えられる。

さらに、住まいの身体的感覚について、アフェクト論を適用し、またそれを拡張しながら、住まいの中で気温や湿度がどのように経験され認識されているかを示す実践やナラティブに注目した。これらの事例では、対象者が蒙るモノの主体性が顕在化された。在日ロシア語圏移住者は、「人になれた[tamed]モノ」を住まいに期待するが、日本の住まいは「自然のまま[untamed]のモノ」であり、気温や湿度の管理を含み維持しにくいと語られた。この事例は、移住という行為が浮き彫りにさせる、住まいをめぐる「自然」と「文化」のあり様への期待を取り巻く議論およびクロード・レヴィ=ストロースに遡る構造主義の議論も可能にしている。

所有物について、家具や食器、土産物、服などが入手されるルートを確認し日本のリサイクルショップやフリーマーケット、在日ロシア語圏移住者コミュニティの SNS 上の売り場などに注目した。移住者ライフコースのそれぞれの展開に沿って購入されるモノやそれらの購入先を考察し、以下の図式の例に代表されるいくつかのパターンを見出した。移住者が経験するアイデンティティ変容や日本社会との関係性、社会統合における変化に焦点を当て、アイデンティティ変容におけるキーワードは、エキゾティシズム、身体的感覚、ノスタルジア、コミュニティ意識などであった。

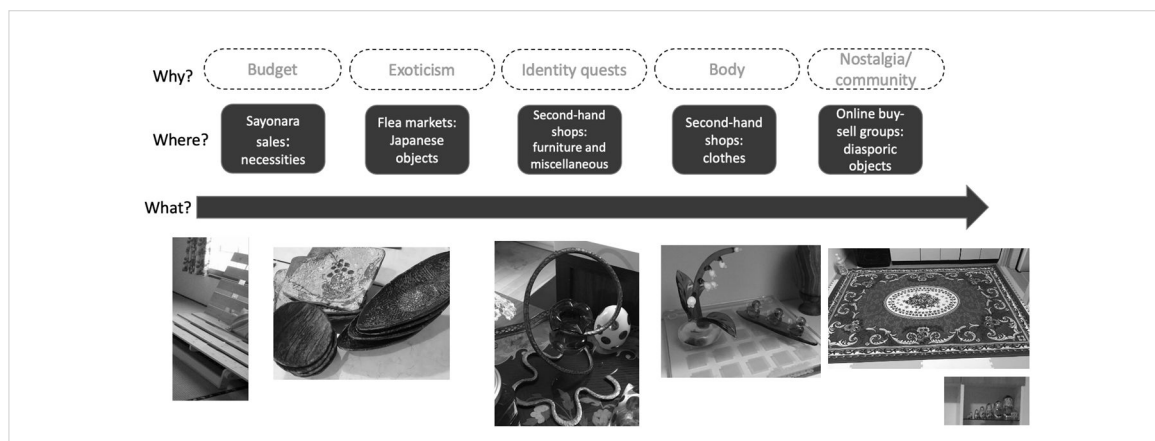


図 2: 移住者のライフコースに沿っての所有物におけるパターンのビジュアル化
写真：研究代表者による撮影・対象者による提供

移住者の所有物に伴う理論的アプローチの一つとして、レヴィ＝ストロースに由来するブリコラージュを採用し、この概念における材料・手段の制限性や社会文化的理屈、抵抗という3つの要素を取り入れた枠組みを適用した。日本の着物からの洋服の制作や同じく DIY のフレームワークで捉えたりサイクルショップでのアンティークのモノの入手、またオンライン・コミュニティでの家具や雑貨の取引を巡る事例を扱った。ブリコラージュの上述の要素の働きとして、在日ロシア語圏移住者が入手するモノがランダムではなく、制限・社会文化的理屈・抵抗により左右されることを明らかにした。具体的には、在日ロシア語圏移住者が、ノスタルジアやロマンティシズム、民族的ルーツへの目覚め、自らのヨーロッパ人もしくはソビエトの過去を持つ人間としての捉え直しといった段階を経て、ブリコラージュ的アイデンティティを形成していることがわかった。また、所有物について、セミオモルフオーシス (Rambelli 2017) という概念を適用し、移住者の住まいにある宗教的かつスピリチュアルな実践に関係のあるオブジェクト (仏壇や達磨、イコン、ロシアのドモヴォーイなど) も対象にし、越境やその所有者や置き場の変更を経るモノの意味・情動上の変化を辿った。

さらに、移住者のモノについて消費財としての見方を採用し、分析対象を女性に限定して移住前の経験との比較の中でモノ (スイーツなどという食を含む) の解釈における変化の過程を辿った。1990年代以降にロシアをはじめとするポスト・ソビエトの国々を後にした、多くの在日ロシア語圏女性の移住前の生活は、それらの国々の政治的不穏ないし経済的不確実性によって特徴付けられていた。本研究では、移住前のこのような経験の後、受入れ国である日本での「無限」の消費選択肢に伴う幸福感という移住当初の感情が、女性たちが日本での生活に慣れるに従ってどう変わってきたのかを考察した。彼女たちのライフコースの展開に伴う新しい感情や態度は、「謙虚に生きること」や「少ないものでやりくりすること」「地球環境を大事にすること」「ジェンダーや健康の意識を維持すること」などといった、新たな価値観が彼女たちの内面に浸透したことによって引き出されたことがわかり、「道徳的自己」のディスコース的構築に焦点を当てた。

コミュニティ形成を問って調査したコミュニティの物質的实践の一つは横浜外国人墓地などにおけるロシア系移民の墓の清掃や保護活動である。参与観察をし始めた当初、アフェクト論の中で論考を予定していたが、移住者による、草や土といった墓地の自然環境との接触を観察する中、情動的親族論といった枠組みを考案した。Carsten (2004) による親族論において、人間をつなげそれらの間柄を固める機能として血や唾などを含むあらゆるサブスタンスへの注目が行われている。本研究では、在日ロシア語圏移住者は、亡きロシア系移民が埋葬されている墓の周りの土や草を触ることで、これまでの移民との情動的なつながりを作り出し、親族としてつながっていないものの世代の関係性を構築していることがわかった。同時に、自分たちがこれまでの移民の墓を清掃しているように、将来の移住者も自分たちの墓のケアを行ってくれることへの期待を通して将来の移住者との象徴的な関係作りがなされていることを明らかにした。

日本社会への影響について、移住者の物質的实践によって共同に使われる空間が受ける変化についてのデータ、およびこれらの行いに参加する日本人当事者（国際家族の一員や友人、不動産業の関係者など）との交渉や妥協、葛藤についてのデータを収集した。移住者は比較的によく必ずしも現地の人々に好まれない住宅に住み、これらの住宅や隣接する地区を活性化する事例が先行研究においても示されてきたが、本研究においても同様の傾向が見出された。上述の墓地を清掃する活動を含め、移住者によるプレースメイキングは、特定の空間の維持・多文化化につながることも明らかにされた。最後に、移住者の物質的实践があらゆる日本のモノ（例えば羽織りや帯など）の独自のリサイクルにより、新たな価値をつけ、日本国外における個人間のモノの物流ネットワークにおいて、これらのモノを再評価するプロセスに関与していることも見えてきた。

結果として、蓄積されたデータの分析や考察は、以下の理論的アプローチや概念の適用・拡張を可能にした。それらは、形態論やアフェクト論、情動的親族論、消費論、またプリコラージュやセミアモルフォシスであり、研究開始当初の目的であった移住者の住まいや物質的实践に伴う理論の発展や適用範囲の拡大化を実現できた。本研究は、従来の目的に沿う形で調査対象とする移住者による物質的实践の領域を広げ、特に住居についてモノのみならず、住まいそれ自体のタイプや性質を明らかにし、移住者が経験する身体的過程に着目した。形態学的観点を意識した上でライフコースに注目することで、これらの過程をロングスパンで捉え、移住者の居住経路を確定することが可能となった。本調査における事例を通して、移住者はその周りにおける物質的世界を経験し絶えず操ることにより、身体や感覚、意味が混ざり合う空間を作り出し、修理などの身体的行為を通して、移住先でのモノの世界に自らを定着させていると同時に、それらのモノを自らに染み付かせるように日常を生きていることがわかった。さらに、1990年代以降のニューカマーでありながら、在日ロシア語圏移住者が物質や身体を巻き込む情動的な行為を通して、自らを日本の土地に根付かせ、過去や現在、未来をつなぐ世代関係、親族関係を作り出すプロセスを示した。

<引用文献>

- Carsten, Janet. 2004. *After Kinship*. Cambridge and New York, NY: Cambridge University Press.
- Clapham, David. 2005. *The Meaning of Housing: A Pathways Approach*. Bristol: Policy Press.
- De León, Jason. 2013. Undocumented Migration, Use Wear, and the Materiality of Habitual Suffering in the Sonoran Desert. *Journal of Material Culture* 18(4): 321-345.
- Dudley, Sandra H. 2010. *Materializing Exile: Material Culture and Embodied Experience among Karenni Refugees in Thailand*. New York, Oxford: Berghahn Books.
- Miller, Daniel. 2008. Migration, Material Culture and Tragedy: Four Moments in Caribbean Migration. *Mobilities* 3(3): 397-413.
- Pechurina, Anna. 2015. *Material Cultures, Migrations, and Identities: What the Eye Cannot See*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Rambelli, Fabio. 2017. Materiality, Labor, and Signification of Sacred Objects in Japanese Buddhism. *Journal of Religion in Japan* 6(1): 1-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 Online First
2. 論文標題 Moving House in Migrant Narratives: The Morphology of Housing Pathways from an Anthropological Perspective	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Housing Studies	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/02673037.2022.2057932	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 21
2. 論文標題 Nine Circles of Goodness Consumer Goods in the Lives of Russian-speaking Migrants in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学研究	6. 最初と最後の頁 77-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32262/wsca.21.0_77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 Walking, Cleaning, and “Kinning”: Material Practice of Grave-Caring among Russian-Speaking Migrants in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 315-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia and Kiyomi Doi	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 Modes of Human Engagement with Materiality: Potentialities of Access to Things	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 271-290
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 18
2. 論文標題 Skin-to-skin with the House: Senses and Affect in the Relationship of Migrant Russian Women in Japan with their Homes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Anthropology	6. 最初と最後の頁 170-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1683478X.2019.1628422	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ゴロウィナ・クセーニヤ	4. 巻 21
2. 論文標題 日本におけるロシア語話者の様相およびロシア語の継承	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばと社会 (特集: オリンピックと言語)	6. 最初と最後の頁 159-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 43(1&2)
2. 論文標題 Daruma Meets Domovoi and Then Some Yoga: Russians in Japan and the Religious-Spiritual Materiality of Migrant Living	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese Religions	6. 最初と最後の頁 145-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 63(2)
2. 論文標題 Procuring, Crafting, and Sensing: Affect and Material Practices of Russian Women in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Vestnik of Saint Petersburg University. History.	6. 最初と最後の頁 488-505
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21638/11701/spbu02.2018.211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Golovina, Ksenia	4. 巻 14
2. 論文標題 Material Culture and Bricolage: Russian-Speaking Migrants in Japan Who Make and Procure Objects	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Forum for Anthropology and Culture	6. 最初と最後の頁 204-227
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31250/1815-8927-2018-14-14-204-227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 What Kettles, Satellite Dishes, and Khrushchyovkas Have in Common: The “Spatiotemporal” Objects of the Russian-speaking Migrants in Japan
3. 学会等名 20th Annual Aleksanteri Conference (Eurasia and Global Migration) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 Nine Circles of Goodness: Consumer Goods in the Lives of Russian-speaking Migrants in Japan
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for the Japanese Studies (Migration and Mobilities Panel) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 Unexpectedly “Soviet:” Material Practices and Housing of Post-Soviet Migrants in Japan
3. 学会等名 Socialist Culture Recycled Conference 2021 (Eastern Europe: From Disillusions to Nostalgia and Beyond) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 Community-building of Russian-Speaking Migrants in Japan: Material Lives and (Digital) Visibility
3. 学会等名 Contemporary European Migrants in Japan (Ryukoku University, Faculty of International Studies) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ゴロウィナ・クセーニヤ
2. 発表標題 墓地を歩き、墓を掃除する 在日ロシア語圏移住者の物質的实践およびライフサイクル
3. 学会等名 白山人類学研究会 (2020年度 第6回)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 Materiality and (Non-) transnationality: Russian-speaking Migrants in Japan Along their Life Course
3. 学会等名 日本文化人類学会 (第53回研究大会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ゴロウィナ・クセーニヤ
2. 発表標題 在日ロシア語圏移住者のオン(オフ)ラインの生活空間におけるマテリアリティと情動
3. 学会等名 第116回 現代人類学研究会「転置の記憶を潜在させる環境 インターネットと親密空間」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Golovina, Ksenia
2. 発表標題 Cups, Chairs, and Graves: Displacement and Materiality in the Lives of Russian-speaking Migrants in Japan
3. 学会等名 Anthropology of Japan in Japan (Fall Meeting 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ゴロウィナ・クセーニヤ
2. 発表標題 日本におけるロシア人の住まい モノを語る、モノが語る
3. 学会等名 白山人類学研究会 (2018年度 第4回)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Protassova, Ekaterina and Yelenevskaya, Maria (Eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 -
3. 書名 分担執筆、担当部分: "Material Stories" and Cross-Referencing: Experiences of Home and Migration Among Women from Russia Living in Japan	

1. 著者名 駒井洋 監修、小林真生 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 208 (担当範囲: 156-158)
3. 書名 『変容する移民コミュニティ 時間・空間・階層』(分担執筆 担当: 「ロシア人 宣教師からITエンジニア」)	

